

『行基』

森岡 稔

民衆済度

《私には考える時が必要だ》

行基は、薬師寺の住持であった師の道昭から譲り受けた経典を持って飛鳥を離れ、かつて行った山林修行をもくろんでいた。めざすは、以前修業した葛城山である。

葛城山は、大和と河内の国境に聳え、金剛山の峰続きにあり、竹内峠を挟んで北方には二上山がある。行基にとって、何度も修行した葛城山はいわば第二の故郷である。身も心も清められる気がした。

苛酷を極める山林修行は、行基に限らず人間を常人と異なるようなものにしていく。八世紀に入ると、異端の僧たちや優婆塞たちが、呪術的な靈驗力を身につけようと山林修行することが流行していた。

これは役小角が呪禁道（じゅごんどう）によって強い靈驗力をもったころから始まっている。山林修行は「山籠もり」ともいわれ、危険な山を歩き、風雨寒暑に耐えることによって滅罪するという宗教的目的をもっている。

寂寞たる窟（いわや）に籠もって木の実を食べたり、断食不眠を伴う荒行をする。行基は、勝手を知っている葛城山であるので、座禅していた窟や小屋が以前修行したときのそのままに残っていることを確認して修行を始めた。山中を歩き回り、五感で自然を感じ取り、万物と自己とが一体となっていく感覚はまさに曼陀羅の世界であるといってもよかった。無念無想の三昧の境地は即身成仏の実践でもある。

このような、苦行精進は、やはり仏神の靈驗力を獲得することもあり、呪術で病気を直したり、鎮魂、豊作祈願、降雨祈祷、予言さえもすることができるようになることもあった。だからこそ、この靈驗力を身につけて己の欲望を満足させようとする輩もいたが、たいていは邪悪な動機や不十分な修行方法によって自滅していった。行基のように、純粋な目的で修行をする者だけが、悟りをひらくことによって靈驗力を副次的に身につけることができるのである。

行基は、しだいに髪も髭ものび放題となり、ぼろぼろになった衣はほぼ皮膚と同化するほどである。

ときおり行う断食のために行基の四肢は骨と皮ばかりになる。

こんな暮らしが三年間も続いた。

その間行基は、経典などは山林修行の邪魔になると思い、小屋の中にずっと放置していた。

ところが、ある時その經典のうち三階宗のものをひもとくことがあり、拾い読みをしているうちどんどん引き込まれていった。

はたして三階宗とは中国隋の時代に宗祖信行が、華嚴・涅槃・法華・維摩などの諸經を統合した宗派で、道昭が玄奘のもとで唯識を学んでいたところに長安で流行していたものである。道昭は帰国する際に三階宗の經典を持ち帰っていた。三階宗は山林修行の価値を認めず、山林修行を小乗的なものと排斥しているのだった。宗祖信行自身、戒律を捨てて自ら労働し得たものを悲田（貧民・病人）・敬田（仏法僧）に供与している。民衆は皆仏性をもつものであり、衆生は不完全で弱いものであるが、同胞意識をもち協力して活動すれば強いものになるという教えを説いていた。

《民衆の力で仏への道がつけられる！》

行基は山林修行を三年間もしていた自分がことごとく否定されていくのを感じた。自分だけが靈驗をもち、自分だけが悟りを開き安心立命を得ることは真の悟りではない。山林修行は、衆生済度という意味から遠くて的はずれであるという三階宗の經典の教えは、行基にとって青天の霹靂（へきれき）となった。

《自らの悟りだけを目的として修行をすることは、自分だけが救われたいという、とらわれの心である。これは、大乘の精神に背（そむ）くことであり、師道昭和上の教えにも悖（もと）ることでもある。菩薩の慈悲を世に広め衆生を救済してこそ仏の教えではないのか！》

衆生済度という使命感に燃えて、行基は長年の山籠もりをやめて下山する。

行基は、ひとまず実家の家原に帰ることにした。

家原に帰ってしばらくすると、行基のことを聞きつけた村人たちが実家を寺とまちがえて続々と集まり始めた。僧侶のいるところ、すなわち寺というわけである。

「行基様、おじいさんが死にました。どうか供養をしてやってください」

頼む際に、野菜や米を置いていく。もちろん、農家は裕福ではない。なけなしのものを置いていくのであった。

そして、自分たちはそのかわりに粟やひえを食べる。

「わしら、死んだらどうなるんやろ。成仏するにはどないしたらええんやろか」

素朴な疑問を行基にぶつける者もいた。行基の住む家原の蜂田家は、まぎれもなく寺として村の者から見られるようになっていく。一般大衆から見れば、確かに行基は法興寺、高宮寺、薬師寺という立派な寺で修行した選り抜かれた高僧である。

仏教が天皇や貴族のものであった時代に、自分たちの身近かに高僧がいるのだから、人々がありがたがないわけがない。

その上、行基は三年にもわたる山林修行で不思議な靈驗力を身につけている。当時の靈驗力とは天眼（てんげん）、天耳、他心、宿住随念などの神通力のことをいう。

「その女は猪の油を頭に塗っている」

「その子供は過去の怨霊が姿を変えたものじゃ」

行基は、自分に見えたままを言うのであるが、行基の不思議な言い方は、人々を驚かせた。それが正しいことがのちにわかると人々は、あらためて行基を信頼しないではいられなかった。行基の言葉は、為政者には『妖言』に思えるのであろうが、民衆にとっては厄災を取り除いてくれる福音である。

蜂田家は、もともと渡来人であり蜂田薬師（くすし）といって医業と薬房を兼ね備えたような家業をしていた。結果、蜂田家は寺院でもあり医院でもあるような役割をするようになる。

「母上、家が寺のようになってしまいました。申し訳ございません」

行基が、そのように母の古爾比売（こにひめ）にあやまった。そんな行基に母は、民人に対する行基の献身的な働きをほめることこそすれ、とがめることなどなかった。村人たちは、この村にも寺ができたと誉れに思った。隣村からさえやってくるものも多くなった。蜂田家はこのままでは手狭になってくる。

《本格的な寺にするにはあちこちと直したり増築したりしなくてはならない》

行基はさっそく、資金不足という問題と取り組むことになった。本格的な寺としては、本尊を安置する本堂、講堂、塔が必要である。蜂田の家の蓄えだけではまかないきれない。ところが、そんな行基の心配はどこへやら。村人たちの寄進（知識）によって、またたく間に寺はできあがっていく。

慶雲元年（704年）、家原寺行基の最初の寺、家原寺（えばらじ）の誕生である。行基このとき三十七歳。行基が強制や命令することなく、農民は自分たちの寺ができることを喜びとした。柱、瓦、板などの資材、米野菜、労働力を提供した。寄進や労働が、そのまま自分たちの幸福につながる……。行基のまわりは、そんな功德に満ちあふれていた。飢饉、疫病、重税と世相は暗く、民衆は救済を求めているのである。

できあがったばかりの家原寺から二里弱のところに和泉国大鳥郡大村里の高蔵という須恵器生産で有名なところがある。行基のうわさを聞いた高蔵の住民がわざわざ家原寺までやってきた。

「行基様、わしらの里までお越しくださいませ。お願い申し上げます」

行基がわけを聞くと、貧窮や須恵器生産の過重労働から病気になる者が多く、死んでもみじめな死に方しかない。何とか供養をしてやりたいという。そこで行基は、何度も高蔵に足を運んだ。住民から懇願され大須恵院を造る。慶雲二年（705年）のことである。大須恵院は、休息の場所であり、かつ死者の葬儀の場でもあった。粗末ではあるが、いちおう仏像も置かれ、行基は仏の教えを説いた。かつては、説教も仏法も寺院でしか聞けなかったが、この大須恵院で民間初めての仏教の説教が説かれたのである。

院とは本格的な寺院とはちがって単に垣をめぐらした建物にすぎない。しかし、産業の衰退によって不安におびえる人々にとって、その程度のものでも行基の救いの手がどんなに

ありがたかったかしれない。

《私は今まで経典などの書物でしか、衆生を救うということを知らなかったが、三階教にある、壊れた車でも縄や添え木で補強すれば荷物を載せて運べるとあったように、弱小な民衆も同朋の力を結束すれば幸せになれ、仏の道は開けるのだ》

行基は、三階教のみならず道昭の教えが初めて肚（はら）におちたように感じた。

大須恵院の設立に協力してくれたのは大村里の豪族、大村直である。

「行基和上、この高蔵にこんな立派な寺をつくってください何ともお礼の申し上げようもござりません。わしらにできることは何でもお申し付けください」

大村直は、涙ぐみながらそう言った。

「これは院であって寺とまで呼べないものではあるが、皆のためになるならこれからも亡くなったお人を供養させていただこう」

皆は元気づけられ、労働に励みをもった。

慶雲三年（706年）になると、行基は同じ和泉郡に蜂田寺をつくることになる。蜂田寺の建立は、茨城池という池による灌漑工事によってもたらされたのである。つまり、池の構築のための集合場所、休息所、本部であったものが、自然に寺院に成長していつてしまう。行基にとって池の開発は、薬師寺において道昭の世話をしていたころ、少しずつ教えてもらっていたことが役に立った。道昭は行基を後継者と認めていたので、技術を伝授したのである。仏教とともに実学的技術がもたらされていたのである。農民は行基から肥料のやり方や溜め池の作り方を教えられ実行した。すると田畑が、みるみるうちに息を吹き返すのである。民衆は、そんな行基の活動を見て、行基をなおさら仏とも菩薩とも思い崇めたのである。

行基の布教の特徴は生産と仏教が結びついている点である。民衆にかぎらず、土豪たちも農作物の増収という形で、現世に福をもたらす行基にももちろん感謝する。貧窮や社会不安におののく彼らにとって、行基はなくてはならぬ存在となっていくのだった。

慶雲二年のときに、胸を病んだ母の古爾比売の転地療養のために、行基は大和添下（そうのしも）郡佐紀に、『佐紀堂』をつくる。さらには慶雲四年（707年）行基四十歳の時に大和の生駒山麓に『生駒仙房（草野仙房）』をつくり母を転居させる。

「すまないねえ。忙しいのに私のためにこんなにまでしてくれて……」

と、年老いた母は、自分の子どもなのに拝んで言う。

「母上様、何をおっしゃいます。母を大事にせずして何が仏道でしょう。お体をおいたわりませ」

行基の母、古爾比売は静かな余生をこの生駒仙房で送り、三年後の和銅三年（710年）に他界する。行基は、そのまま生駒仙房にとどまって喪に服した。行基は、ここでまた自分の生き方に疑問を覚える。

《私は三階宗の教えで山林修行をいったん捨てた。民衆済度のために家原寺、大須恵院、蜂

田寺をつくって自分なりに頑張って民衆の喜ぶ顔を見た。だが、母の病が平癒するよう祈禱したにもかかわらずあの世に行ってしまった。私の霊験力は、それほどのものでしかなかったのだ。何が民衆済度だ。自分の母親も救えないくせに……。山籠もりの修行が足りなかったのか、それとも民衆済度をめざし、山を降りたから霊験力が鈍ったか！ 霊験力を取り戻すため、また山籠もりをすべきだ！》

捨てたはずの山林修行であった。行基は生駒山で山林修行を始めた。修行の振り出しにもどって、一からやり直すことにした。葛城山での山籠もりよりも、数段苛酷をきわめた修行は、行基をさらに強靱な精神力の持ち主にした。もちろん、山林修行ばかりでなく、竹林寺にもどっては経典をよく読み、思索をくりかえした。

そして三年たち、母親への思慕から抜け出し大慈悲に目覚めて、再び行基は下山した。

《私にはやらなければならないことがある。新しい出発だ！》

街道はむせかえるような木々の新緑につつまれていた。行基は、とにかく行動したかった。慈悲に目覚めた行基は前よりもいっそう衆生に仏の道を説きたい、菩薩行に励みたいという気持ちに駆られていた。

《僧とは来世のことばかりを説くのではなく、この世での善行をひろめ、功德を分かち合うものなのではないだろうか。》

現世主義に磨きがかかっていく。

行基は、霊亀二年（716年）から養老四年（720）までに恩光寺、隆福院、石凝院と立て続けに創建する。これら三寺院は、摂津・河内・平城京を結ぶ交通路、つまり暗峠越え・辻子谷越えの道路に面していた。寺院を構築することに手をかしてくれたのは庸調を京まで運ぶ運脚夫たちと役民である。和銅元年（708年）、飛鳥の藤原京にあった廟堂は藤原不比等の主張する平城遷都を宣した。唐の長安に倣（なら）って壮大な京をめざして、平城京の造営は急がれ畿外から多くの役民が動員された。徴発されても行き帰りの食料は自分もちであり、工事は苛酷をきわめた。したがって、行き倒れになるのは、運脚夫たちばかりでない。鞭とこん棒とによる奴隸的労働からから逃亡してきた役民たちも多かったのである。

「お坊さま……。わしらみたいなもんはどうしてそんなに親切にしてくださるだ」

寺院で介抱されながら、役民たちが必ず発する言葉である。そんな役民も食事を与えられ、十分な休息をえて、数日後回復すると、寺の仕事に就いて介抱する側にまわる。

《御恩を返さねば、行基菩薩様に申しわけない》

そう思いながら、かつての自分のように行き倒れになった人に水や粥を与えたりする。行基は常々こう言っていた。

「わしが菩薩なら皆も菩薩じゃ。お前たちが、故郷で田を耕し稲を収穫するように、人は、いろいろなことに施しをすることによって果報を得るのだ。これを菩薩行という。だから、今こうして人のために働いているお前たちは私と何らかわりがない。だから、お前たちすべ

てが菩薩といえるのじゃ」

寺にいるものの中には、そのまま残って僧になるものもいれば、故郷に残してきた家族を忘れ難く帰るものもいた。僧といっても、官寺で修行をつみ得度をうけ受戒するといったことを踏まえないのだから、私度僧である。私度僧は明らかに僧尼令違反である。

僧侶になれば、税や課役を免除されるので私度僧になるものが多くそれをくい止めるために、『公験（くげん）』という僧侶の免許を確かめる制度を設けるという格が養老四年に出た。ところが行基は、これらの私度僧を受け入れることを意に介さなかった。匿（かうま）うことだけでも重罪となる俗法の僧尼令など、仏の教えによる菩薩行の前には、ものの数ではなかった。

行基は、重要な交通路各所に寺院とまでいかない無料宿泊所の『布施屋』を建設した。本来は運脚夫などのために布施屋のような施設は国郡司がつくらなければならないが、自分の出世しか考えない官僚はそのような建設をなかなか実行しない。行基は国郡司にかわって布施屋を設けたのである。寺院や布施屋では組織的に仕事が分担されていく。私度僧になっているものは寺院管理、勧進、乞食、托鉢、医療を行い、運脚夫や役民出身の者は建築、土木労働をした。皆それぞれ自分にできる精一杯のことをしたのである。行基のところにありとあらゆる階層の者が集まり、大工・左官・瓦職人や農業従事者、土豪さらには下級官僚までが加わった。その数は、一万を越えるに至る。行基の活動範囲も和泉・河内・摂津と拡大していった。

不比等と義淵

養老五年（721）に、行基はそれまでの京周辺の寺院とはちがって京のただ中、右京三条三坊に菅原寺（喜光寺）を建立した。逃亡役民や運脚夫という流動的な人々ではなく、都に居住する人々を布教の対象とするようになったのである。仏教に限らず宗教は都市に進出することによってさらに大規模な集団となる。

この菅原寺は、以前行基の母が住んでいた右京佐紀堂にも近く、寺史乙丸（てらのふひとおとまる）が自分の居宅をそのまま行基に寄進し寺院としたものであった。右京三条三坊には、仏教にも造詣が深い渡来系氏族が多く住んでいるという条件も幸いした。寺史乙丸は秦氏系渡来氏族の下級官吏であったが、行基の先祖の菩提を祈るという教えを篤く信奉していた。君臣の恩に報いることは、功德によって現実的利益につながる。行基はこのようにして、都市の下級官吏も吸収していったのである。

行基が、平城京の街区にも堂々と布教を始めることができたのは、先年の養老四年（720）に、禁圧を加えていた右大臣藤原不比等が死んだからであった。

それまで行基集団に対し、廟堂はあれこれと圧力を増して活動をおさえこもうとしたが、結局むだに終わっていたものの、不比等の弾圧は厳しいものであった。

たとえば不比等を首班とする廟堂は、さきの養老元年（717）四月に行基集団に対して行基を「小僧（しょうそう）」と蔑（さげす）み、その集団を指を切って灯火とし、臂を剥いで経文を写し、妄りに罪福を説いたり勝手な托鉢を行って世を惑わしているといつて非難する内容の禁圧の詔を出した。仏教は確かに善因楽果、悪因苦果という因果律を説くが、廟堂はそうは受け取らず「罪福を説く」ことは、疾病天災などの原因が帝王の徳の低さに起因するという政府批判を行っているとした。

ところが実際のところ、指を切って灯をともしたり、臂（ひじ）を剥（は）いで経文を書くことも梵網經（ぼんもうきょう）などの大乘戒では「捨身」として肯定されているものである。

藤原不比等は、行基集団を放置している僧綱たちに切齒扼腕した。僧綱とは仏教界の最高指導機関であつて、僧正・大僧都・小僧都・律師で形成されているものである。

「僧綱たちは何をしておる。なぜ取り締まらないのだ！」

不比等のいらだちをよそに、僧綱たちはいっこうに動こうとしない。

僧正の義淵は、道昭の弟子であるし、行基との関係も深い。また大僧都・小僧都・律師たちはいずれも新羅学問僧を経験してきており、新羅僧の元暁の活躍を留学中に見聞してきているので、行基の活躍に元暁の姿を彷彿（ほうふつ）とさせているのだ。

そんな僧綱たちが、おいそれと俗人不比等の言うことを聞くわけがない。僧尼令に違反しても、違反に対する処断権は太政官にあるので、僧綱たちには処罰する権限がないと言い訳して行基を裁かなかった。

業を煮やした不比等は、とうとう龍蓋寺（岡寺）にいる僧正の義淵に相談した。

義淵は、天智天皇によって、草壁皇子とともに岡本の宮で一緒に育てられたという由来をもつ高僧である。行基・道慈・良弁・隆尊などを教えたという。藤原不比等と義淵は幼少からの旧知の間柄である。二人の大物が並び座る。両者とも貫録という点で引けをとらない。義淵の顔は皺だらけで長い耳朶、せりだした眉骨、肉厚の口唇は重厚さを漂わしている。かたや、不比等。律令制度を確立させ、和同開珎の鑄造、平城京の造営、古事記・日本書紀の編纂をすすめ日本の基礎を作った。不比等も眉は剛毛ではねあがり、目は猫の目のようであり、いかにも権謀術数に長けた感じである。頬骨はいくらか盛り上がり自信満々の面構えをみせていた。筋肉質の身体は衣服を通してさえも伝わってくる。義淵の前でさえも、少しも動じた様子はなかった。六十歳の不比等は、精悍な感じがするので実際よりも十歳は若く見える。

「義淵よ、そなたも存じているはずの行基について相談したい」

「どういうことござりましょう」

義淵は、とりあえず不比等の出方を見ようと思った。まず、不比等がどういう心積もりで

きているのかを見定めたうえで、答えようとしたのである。

「行基らの所業を、どう思うか。僧とは寺に寂居して三宝を護り仏の道につかえることが務めであろう。寺院外でみだりに罪福を説き、人心を惑わす行基のやからを許しておくことはできないと思うが……」

養老元年（717）四月の詔第二項をまるで棒読みしているかのように話す。僧綱が行基を取り締まれといわんばかりである。

「御意（ぎょい）にござります。しかし、行基の行いは大乘戒に則って行われており、經典の戒めを忠実に実行すれば行基のようになってしまいます。僧綱いや仏の道を歩む者にとりましては、いたしかたありません」

大乘戒の「菩薩行」とは、自分だけでなく、衆生も悟りに導く行動をいう。行基の行動は、大乘仏教の精神を具現化したものにほかならない。

不比等は、義淵がその師道昭や法相宗との関係から行基の肩をもつことは始めから分かっていた。単なる知己であるから支持するのであれば、意見を覆すのは簡単だが、行基が仏教の思想的根拠に基づいて行動していると言うのであれば、翻意させるのは難しい。不比等は、困惑した。

「他の僧綱たちも同じような考えか」

「さようにござります。皆、新羅留学生（るがくしょう）でしたので、新羅大乘仏教の薫陶を受けてござりまする」

あえて、元暁の影響とは言わなかったのは、元暁の名を口にしても、不比等は誰のことか分からないと義淵は思ったからである。

「行基のところへ、あれほど人が集まるのは何故か」

取り締まりたい一方の不比等に対して、いまさら菩薩戒の重要性を説いてもしかたがないよ義淵は思ったが、

「一切の衆生はすでに仏であると説き、先祖の報恩を祈願し、供養を心掛けていることにござりましょう」

と述べた。

不比等は、先祖供養の話聞いてぐっときてしまった。

なぜなら、不比等は人一倍、先祖つまり藤原鎌足の供養に熱心であったからである。不比等は、慶雲三年（706）十月に父鎌足にならって維摩経を読む維摩会（ゆいまえ）を宮城の東第で開いたぐらいである。弾圧の一角がくずれてしまいそうになったので、他の理由を不比等は探さなければならなくなった。

「それだけか」

「いいえ、他にもございます。現世の善行が来世ばかりでなく、現世に福をもたらすといっておるようです」

「それは、布教のための単なる人あつめのためではないのか」

「そうではありません。自分のことだけでなく人のために利することこそ幸福につながるという教えでございます。利他の心とでも申しましょうか。皆と力を合わせて池や橋をつくったり、灌漑をしているのはそういう心根から行っているのです」

「利他とな……」

不比等には、先祖供養や善行が現世に福をもたらすところまではわかっても、利他の心までは本当には理解できなかった。権力者の性（さが）ともいうべきか。

強健な不比等も原因不明の病で倒れ、養老四年（720）八月にあっけなく他界してしまう。藤原不比等の死によって、行基集団に対する圧力が見るからに消えてゆく。こんな背景があって、平城京の中に菅原寺ができあがったのである。

行基集団は、ただひたすら働きつづけ、橋を架け、池を構築して灌漑し、寺院や道をつくりあげた。現世の善行が来世でなく現世に善い報いとなってもどってくる。そんな行基の教えに民衆のみならず土豪たちも従った。

ところが、行基たちの自由な活動もつかの間であった。

藤原不比等の死後、政権は法に厳しい右大臣長屋王に移ったからである。長屋王は、天武天皇の孫で壬申の乱で活躍した高市（たけち）皇子の子である。血筋の良さからすれば聖武天皇にも劣ることはない長屋王の政権は、不比等に劣らず僧侶の規律にはことのほかうるさかった。

大納言長屋王は、行基たちの行動には目を光らせ、養老六年（722）太政官上奏文を出させて、逃散（ちょうさん）し浮浪してなった私度僧や不法な民間布教を厳しくとりまとめた。

僧綱に対しても、不比等政権の時よりむしろ風当たりが強くなり僧綱が薬師寺に集められて政権の管理下に置かれた。私度僧を吸収している行基集団にとっては、長屋王の政策によって、やりにくい状況が続いた。

「ひとまず京から和泉へもどりましょう」

数々の弟子たちからの勧めもあって、行基は、平城京からいったん本貫の和泉へ引っ込むことにした。

行基は、和泉に戻ると堤防の構築、池の整備し灌漑や道づくり、布施屋の運営など八面六臂（はちめんろっぴ）の活動をした。

池溝を整備することによって荒地はどんどん開墾されていく。

新田開発は、土豪たちに大きな利益をもたらす。

土豪たちの実益に加えて、追善という先祖にたいする供養によって現世の利益を受けることができるという行基の教えは受け入れやすかった。

土豪たちは、競って行基を保護応援するようになった。

「行基大徳（だいとこ）のためなら、何でもさせてもらいます」

行基大徳とか行基菩薩とか呼ばれるようになって、行基は慢心することはなかった。

もともと行基は、世俗の名利、蓄財、権勢欲などとは無縁であり、行基の頭の中にあるのは、大乘による菩薩行や利他しかなかった。

そんな行基に対して、追い風が吹く。政府がすでに養老六年に出した良田百万町歩開墾計画に続けて、養老七年四月（723）『三世一身の法』が発令されたのである。新田を開墾したものは三代にわたって私有を認めるというものであった。律令制度が崩されたわけだが、豪族たちは喜んだ。行基たちが池溝を築いて灌漑を施したり、耕地を増やしたりしたことが承認される形となったのである。

「さすが行基菩薩様じゃ。行基様のおやりになることが認められたのじゃ」

長屋王政権の行基らに対する禁圧が有名無実のものとなっていく。

長屋王の禁圧は、行基に本貫地への撤退させたのが、かえって行基の活動を大きくする契機となってしまったのである。その後、神亀年間（724～728）から天平年間初期にかけてのいわゆる行基四十九院の建立へと発展していく。

行基集団禁圧には失敗はしたものの、長屋王は右大臣となり、左大臣が空席であったため絶大な権力が長屋王に集まった。

一方、長屋王は、中納言の藤原武智麻呂と内臣（うちつおみ）の藤原房前と対立していた。長屋王の身边に、反対派の策謀がしだいに張りめぐらされていく。

神亀元年（724）に聖武天皇が即位した二日後、次のような聖武天皇の詔があった。『勅（みことのり）して正一位藤原夫人（ぶにん）を尊（たふと）びて大夫人（だいぶにん）と称（まう）す』

これを長屋王はおかしいと言い出した。令（りょう）には、天皇の母、宮子を呼ぶには皇太夫人（こうたいぶにん）とするのが正しい。勅に従えば令に違反し、令に従えば違勅になってしまうのではないかと。勅を作り上げたのは藤原氏であるから、長屋王は、藤原氏の顔に泥を塗ったことになる。藤原氏は、長屋王をひどく恐れた。そこへ、重大事件が起こる。神亀四年（727）に、聖武天皇と光明子との間に生まれた基（もと）皇子が、一年ほどで死んでしまったのである。藤原氏はそれを、長屋王が左道を学んだせいだと言いがかりをつけて聖武天皇に進言し、長屋王を一族もろとも自殺に追い込んでしまった。天平元年（729年）二月のことである。長屋王の死によって行基への禁圧は完全に緩んだ。

天平二年（730）九月二十九日に、平城京東にある山の原で行基集団の大規模な野天の集会在催された。それまで、多人数の集会はいくつかあったものの一万人規模の集会は初めてである。『三世一身の法』という追い風に乗った行基集団は、畿内畿外各所に布施屋や寺院を次々に造ったあと、和泉から平城京にもどってきていた。集まった民衆は行基が集会に現れると熱狂した。

「行基菩薩様じゃ！」

民衆が行基の姿を見ようとして必死である。姿を見ることだけでも救われたと感じるようである。行基は、そのような民衆に対して、にこにこ応じるだけであった。いつもと変

わない行基である。もともと行基は、これほどの人数を集めようとして集めたのではない。自然に集まってきたわけであるから、集めて政治的にどうしようという気はさらさらない。

行基は説法することだけにやってきた。行基は、皆に聞こえるようありったけの大きな声を出した。

「皆の衆、私を菩薩、生き仏と呼ぶのなら、それはちがう。わしという人間はお前たちのなかにいる。お前たちもわたしのなかにいる。仏もそうじゃ。お前たちの中におりなさる。この世のもの的一切はこころによって生じる。わかるか、こころじゃ。そして欲を捨て慈悲のこころをもて。自分にこだわりがあるとおまえたちは不幸になる。こだわりやとらわれから解き放たれるには、他を利することじゃ。善を積めば幸せになれるのじゃ」

行基は、唯識と菩薩行を民衆に分かりやすく説くのであった。行基の声は、一万人の群衆全部に聞こえるはずもなかったが、民衆はすでに行基の話は何遍でも聞いているから聞かなくてわかっている。行基のそばにすることが至福なのである。政府からみれば、行基が純粹に説法をするつもりでも一万人集会は脅威に見える。集会を解散させるために弾正台や衛門府から役人が派遣された。

長屋王にかわって、藤原四卿が台頭する。藤原四卿とは、武智麻呂・房前・宇合・麻呂である。

しかし、この四卿も天平九年（737）、九州筑紫太宰府から流行してきた天然痘（痘瘡もがさ）によって全員死んでしまう。

聖武天皇は、基皇子の死による動揺があったからとはいえ、藤原氏の進言をそのまま受け入れ、長屋王を死に至らしめた責任を感じていた。まして、藤原四子の急死である。長屋王のたたりと考えるのに時間はかからなかった。光明皇后とても同じである。仏教に帰依する気持ちが芽生え、長屋王供養のために行基の活動をまねて、天平二年四月に皇后宮職に施薬院をおいて病人を療養させたほどの信仰ぶりとなった。

行基たちの天平二年の大集会のあと、行基集団は摂津と山城に進出した。善源院、船息（せんそく）院および尼院が建立された。船息とは船舶の休息地という意味で、早く言えば港のことである。行基の教化は、陸上だけでなく海上関係者まで及んでいった。

しだいに、行基の活動は律令の不備を補完するものとして政府から見られるようになり、ついに、政府は行基集団に対し、天平三年の八月に、

「行基につく信者のうち男六十歳以上、女五十五歳以上の者の出家を許す」

という、事実上禁圧を解く内容の詔が発せられた。詔が発せられたとき、行基たちは、河内国の狭山池を修復していたころであった。工事中にその報が伝えられると、皆は歓喜につつまれた。

「よかったのう、よかったのう」

作業の手を休め、肩を抱き合いながら、うれし涙にくれる。

「おまえたちの苦勞が実った。仏様はおまえたちに恵みを与えてくださったのだよ」

行基も日焼けした顔をほころばせ、心から喜んだ。行基集團のなかの私度僧に得度を許すというのだから、今までの禁圧は何だったのかと不思議に思われるくらいである。

政府は明らかに行基の活動を認め、協力さえ求めるようになってきた。天平三年の政府の宥和策によって行基集團の活動はますます発展していき、天平二年から五年の短期間で、のちの『行基四十九院』の多くを完成させてしまった。

橘諸兄

藤原四卿の死によって天平九年（737）、政権は大納言橘諸兄（たちばなのもろえ）のもとに転がりこんできた。

橘諸兄は、美努王（みぬおう）と県犬養三千代（あがたいぬかいのみちよ）との間の子である。

ところが、九州へ美努王が赴任しているうちに県犬養三千代は藤原不比等と結ばれたのだから、橘諸兄が、反藤原であるのは明らかである。一方で藤原氏の中枢ともいべき光明皇后とは、同母の姉弟でもある。

藤原四卿の死後、光明皇后は、橘諸兄を頼りにした。参議には武智麻呂の長男の温厚な藤原豊成もかろうじて残っていたが、鋭敏ではない。

橘諸兄のもとに僧玄昉（げんぼう）と吉備真備（きびのまきび）がいた。

玄昉は阿刀（あと）氏出身で義淵から法相宗を学んだあと、霊龜二年（716）に阿部仲麻呂・吉備真備らとともに入唐し、十八年間在唐した。唐の玄宗皇帝に重用されて、三品の位に准じられ、紫の袈裟の着用を許された。帰国の際に仏像と五千余巻もの仏典をもたらした。じきに、内道場（宮中内の礼拝修行場）に入り活躍し、聖武天皇の母宮子の長年の鬱病を治癒させる。

仏教心に厚い光明皇后も玄昉に帰依（きえ）した。

もうひとりの吉備出身の吉備真備は、「唐礼」130巻などの漢籍などを持ち帰った。学識を認められて中宮亮（ちゅうぐうのすけ）となり光明皇后の側近として勢力をのばした。

藤原四卿の死により凋落した藤原氏のうち、太宰府に左遷されていた広嗣は、橘諸兄や吉備真備の宮中における跳梁に我慢できず、とうとう天平十二年（740年）八月二十九日、玄昉、吉備真備を糾弾する上表文とともに兵を挙げた。

大野東人（おおのあずまん）を大將軍にして、藤原広嗣の反乱は一カ月余りで鎮圧されたが、その報が京に届かない十月二十六日に突然、不安におびえていた聖武天皇は、伊勢神宮に戦勝を祈願するといって関東行幸を断行してしまう。

伊勢にいるときに、やっと戦勝報告をうけとったものの、平城京に帰らず長屋王の怨念と疫病で穢（けが）れ、藤原氏の残存する平城京を嫌って、都を恭仁、紫香樂（信樂）、難波

と遷すという、いわゆる『五年間の彷徨』を始める。

行基が、はじめて聖武天皇と謁見するのは、この彷徨の間である。

聖武天皇は、伊勢から美濃、近江をへて、山背の相楽郡にあった橘諸兄の別業（別荘）に向かう途中で突然、恭仁に遷都すると言い出した。これには、背後に反藤原の橘諸兄が影がちらつく。橘諸兄としても恭仁京遷都を実現して、自分の権勢を確立したいと思っていた。

恭仁京建設にやっきとなっている橘諸兄の頭に思い浮かんだのは、行基であった。

天平十二年（740）、ちょうど行基は平城京から恭仁への入り口、泉里に泉川（木津川）をまたいだ泉大橋を架けているところであった。いつものごとく、架橋のために北詰に泉橋院もつくりはじめていた。それに付属してつくった尼院はのちに誓願寺となる。院をつくれば、女性を収容する尼院をつくるのが行基の常であった。

泉里（木津）は木材の集積地であり、水陸交通の要衝であった。平城京から恭仁へ赴くには、その泉大橋を渡らなければならない。

恭仁に別業のある橘諸兄は聖武天皇が恭仁行幸の前に、行基集団の献身的に働く姿を見ていた。そこで行基に恭仁京建設の協力を依頼することを思いついたのであった。

《行基の池溝、道、橋、寺院づくりには定評がある。そうか、そのどれもこれも、このようにもくもくと働く民の力のなせる業（わざ）であったのか。しかしながら、どうして使役せずにこのように懸命に働くのか……。ともあれ、わしの別業の恭仁でこういう橋をつくってくれるのはありがたいものじゃ。行基とやらに会って礼を言いたい》

そんな風に思っているところへ、聖武天皇の恭仁京遷都の計画である。橘諸兄が行基に京建設の依頼を決心したのは、自然のなりゆきであった。

橘諸兄は、聖武天皇に行基に謁見するかどうかおそろおそろ伺いをたててみた。すると、聖武天皇はすぐに行基に会う機会をつくるよう手配を命じたのである。

恭仁京に限らず、都造りには人手がたくさんいる。どれだけ働く人間を集めることができるかがその政権を握るものの手腕にほかならない。橘諸兄は、行基に手をついてでも頼みたい気持ちに駆られた。

聖武天皇にしても、平城京にすんなり帰ることのできない状況でもあり、恭仁京をつくるには、行基級の人間の協力がなければ不可能だということぐらいわかっていた。謁見の条件は揃（そろ）いすぎていた。

行基集団の皆は腰を抜かすほど驚いた。帝が行基に会うというとてもないことに、恐れすら感じたのである。最初は、皆が冗談に思ったほどである。あれほど禁圧されていた行基集団である。無理もない。

聖武天皇が謁見する前に、右大臣橘諸兄が行基に会いにきていたので、まさかとは思っていた。行基集団のものたちは、しだいにこれが夢ではなく現実のものであることだと思い始めてきた。

「恭仁の里に橋を渡してくれて有り難く存ずる。何か褒美にと、帝（みかど）もおぼしめしでございます」

「これは異なこと。民は自分たちのために行ったことゆえ、褒美をもらうことなど面はゆいことでございます」

「いえ、恭仁に都を遷す帝のお考えもござりますれば、そのように申されずともよろしかろう」

「えっ」

行基と傍らの弟子、景静（けいせい）、真成（しんぜい）も一斉に驚きの声をあげた。

驚いたのは、恭仁に都を遷すという急な話を聞いたからだけではなく、恭仁が京となることは無理だととっさに考えたからである。

山がちで平野が少ないという狭隘の土地である。いくら、橘諸兄の別業があり、風景がよいといっても都にするところではない。

たとえ、木材の集積地であり、交通の便はよいにしてでもである。

「そこでじゃ。行基大徳に都づくりに力をかしていただきたいと帝も思し召しである」

橘諸兄は、行基に有無を言わせないほどの勢いで話した。

いつもは尊大な言い方をする橘諸兄であるが、さすがにものを頼む立場であるので行基のことを「行基大徳（だいとこ）」と呼んでいる。必死な様子であった。

行基は、都建設の協力には、即答せずに、帝の謁見にだけ承諾した。

天平十三年（741年）三月十七日、聖武帝は泉橋院に行幸した。

聖武天皇は、行基と初対面にもかかわらず行基と会っていると安らぎを覚えた。仏教帰依の志はすでにあり、行基のやり方に共感を覚えていたからである。

聖武天皇は前年の天平十二年二月、広嗣の反乱前に河内国大県（おおの）の知識寺に安置してあった廬舎那仏（るしゃなぶつ）を礼拝し、自分もこのような仏像を造立してみたいと思った。

「智識寺」という名前は、仏教に結縁したいと思う人たちが自発的に寄進したり、労働を提供したりする「善智識」からとられている。

民が自分から進んで力を合わせて造った寺、智識寺。即位してからろくなことのなかった聖武天皇は、このような寺と廬舎那仏を前にして本当にこころ暖まる気持ちになったのであった。僧良弁、光明皇后のすすめもあって国分寺建立の詔を天平十三年二月一四日に出した。

むしろ聖武天皇の方から行基に会いたかったのである。

胸襟（きょうきん）を開いて話し合うためにも、人払いがなされ、橘諸兄さえも席をはずした。

「行基大徳は、いろいろな国に寺院、橋、池をつくっておられるとか」

語り口は、橘諸兄よりも丁寧なくらいである。

「さようございます」

「なにゆえにでしょうか」

「師道昭から譲りうけた意思を実現いたしておる次第でございます。また、菩薩行でござりますれば」

「菩薩行とな」

「悟りを得るための菩薩行が経典に書かれております。幸せを生み出すためには、布施をしなければなりません。田畑を耕作すれば田畑から稲、作物が得られます。同じように父母・老人・貧民・病人・僧尼のなど、布施をする相手を田とみなし、そこから福を得るのにござります。井戸を掘る、橋をわたす、道路をつくる、薬を施す、食べ物を与える、これらすべて福田にたいする布施にござりまする」

鎮護国家のための仏教とは違った教えを聖武天皇は目を見開く気持ちで聞いた。

「この世に生をうけた者は、みな苦しみます。生老病死は四苦といって生きている以上避けられないものにござります。苦しみが生じるおおもとは、とらわれの念にあります。このとらわれから救われるには他を利することにございます。それを教えることがわたしの勤めであり、わたしにとっての菩薩行、衆生済度（しゅじょうさいど）にございます」

行基はかつて、不比等に言ったのと同じ内容のことを聖武天皇にくりかえした。

《とらわれ、苦しみ、菩薩行、衆生済度……》

聖武天皇はその言葉をひとつひとつ反芻するようにつぶやいた。

『衆生済度』という言葉が聖武帝は初めて聞いた。

これまでの自分の人生を振り返ると、藤原氏に振りまわされ、長屋王の怨霊におびえ、藤原広嗣の反乱によって平城京を飛び出してきたという苦しみばかり思い出される。

だが行基は、人間が生きるということは、そもそも苦しみにほかならないと説く。

聖武天皇は自分だけが苦しんでいると思っていた。行基は、とらわれから救われるには他人を思い、他を利することが大切だと言う。

聖武帝は感動した。初めて人間らしい気持ちになったような気がした。

帝として国を民衆の力で立て直したいと、このときっぱりと決意したのである。

「朕は、去年（こぞ）に河内の智識寺に参り、そこに奉られていた廬舎那仏にととても感じ入りました。朕は、あのように民が力をあわせた寺をつくって仏のお力で民人が幸せに暮らすことができればと思っております。できれば、あのような仏像を造立したい。今の平城の都では、それもかなうことはないでしょう。そこで、ひとつ行基大徳に頼みがあります。恭仁に新しい京をつくりたいのですが手伝ってもらえないでしょうか」

行基の目の前にいるのは帝であるが生きる衆生の一人でもある。

彷徨し、進むべき道を模索している帝は行基に救いの手をさしのべて欲しいと願っている。

行基は、官寺で学問としておさまっている仏教を、衆生の一人でも多くの者に仏の慈悲を与えることをめざしてきた。聖武天皇は、国をあげて仏教に帰依するつもりだと行基に述べ

ている。衆生済度の盧舎那仏もつくってみたいという。まさに行基の願いと同じではないか。

七十四歳の行基は、自分でどこまで生きれるかわからないが、この世に生きているうちの最後の仕事だと心得、聖武天皇に返事をした。

「承知いたしました。帝の勸めにお従いさせていただきますよう」

恭仁にもどった聖武帝は、さっそく泉橋院・泉大橋の保護を約束し、さらに行基集団の優婆塞七百五十人に得度を許すことにした。

行基の協力により、恭仁京造営は順調に進んでいく。

紫香樂の大仏

聖武天皇が行基にしか言っていなかった盧舎那仏造立について天平十五年（642）十月十六日の詔で次のように公（おおやけ）にした。

「天下の富を所有しているのは、朕であるが、人が一枝の草、一にぎりの土を運んで像を造るのに協力しようとする者があれば自由にしよう認めなさい」

妙なことに、盧舎那仏造立は恭仁京にではなく、近江紫香樂に甲賀寺を建立して安置することになった。天平十四年九月十二日に、台風が近畿地方を襲い、せっかくできあがっていた恭仁京の多くの建物が宮中を含めて甚大な被害を被（こうむ）った。

古代の人々は特に天変地異を嫌う。まして新京にけちがついたとして聖武天皇は、恭仁を放棄する気持ちになっていた。

一方、紫香樂の丘陵地帯は、多くの巨木を切り出す柚場（そまば）であり、良質の粘土と住みを産出し、銅を得るにも琵琶湖から瀬田川・大戸川へと船で運べる便利さがある。

そのような理由から、聖武天皇は大仏を恭仁京ではなく紫香樂につくる気になったのである。

大仏づくりは大きな資金と労働力が必要である。再び、行基の力が必要になってきた。すでに恭仁京づくりを無理を承知で頼まれた行基は、それこそ老骨に鞭打って造京に励んでいた。その上に、盧舎那仏の勧進にまわってくれとは橘諸兄も言いにくかった。

詔の翌日に橘諸兄は、京建設のため台風にもめげずに頑張っている行基を訪（たず）ねた。

詔の出る前にすでに聖武天皇と行基との間で盧舎那仏の話は出ていた。諸兄が紫香樂大仏の勧進の依頼をすると行基は、何の抵抗もなく承諾した。

橘諸兄は、聖武天皇の行基謁見の際に同席していなかったもので、そんな話が出ていたとはつゆ知らず、いらぬ取り越し苦勞をしたのであった。

「盧舎那仏造立の詔が出たとお聞きしております。帝に拝謁したときにすでにお話がありました。河内の智識寺の大仏は、みな善智識によってできあがったものです。紫香樂に盧舎那仏をつくることに同意いたします。恭仁京づくりが最後の仕事だとわきまえていまし

たが、もうひと頑張りして、紫香楽に大仏をつくる勸進をさせていただきますよう」

左大臣橘諸兄は、行基の偉大さにうたれ、行基に対し伏せるように頭を下げた。

行基とその弟子たちは詔から四日後には、勸進にまわっている。

天平十四年（742）から二年間は、聖武天皇は恭仁京と紫香楽とを頻繁に往復した。聖武も大仏造立を行基一人だけに頼んで、まかせっきりにはいかなかったのも、何とか寄進を集める方法を考えた。

「諸兄よ、何かよい手だてはないものか」

「先に発布いたしました『三世一身の法』を広げ、墾田を開発した者には永久（とわ）にその者のもち主にすることになれば民は懸命に富を蓄えます。さすれば大仏に知識（寄進）を集めることができます」

「知識をどうやっておしすすめるのか」

「知識をするのは主に豪族です。知識をした豪族には位階を与え、位階が上がった分だけさらに墾田開発を許せば、さかんに寄進をするにまちがいありません」

「それはよい考えじゃ。すぐにとりかかるように」

「御意！」

こうして、天平十五年（743）五月二十七日に「墾田永世私財法」が発布された。橘諸兄は、この「墾田永世私財法」を利用して、私有地を獲得し橘家の勢力を発展させることができることがわかっていた。一石二鳥の策なのである。橘諸兄の先導はあるにしても、藤原氏の勢力が弱まっていたので、このような大胆な政策を出せるほど聖武天皇は権力を掌握しており、皇親政治をしていたと言える。聖武天皇は、帝に就（つ）いて初めて自分なりの決断をしているのである。

ただし、皮肉にもこの法によって藤原氏も息を吹きかえした。

「墾田永世私財法」の出る少し前、恭仁京内裏において、五月五日の節句の際に、阿部（あべ）皇太子は、五節田舞（ごせちのたまい）を舞った。五節田舞とは、かつて天武天皇が君臣祖子の秩序は、礼（らい）と楽（がく）の二つを並行することによって平和に保てると考えて始めた舞である。聖武天皇は、天武天皇の創始した舞を皇太子に舞わせたのであるから、天智天皇系の藤原氏に対しての示威行為でもあった。

のちに、孝謙天皇となる阿部皇太子に『礼記』（らいき）などを講じた吉備真備（きびのまきび）も橘諸兄配下であるから反藤原勢力である。

五節田舞による秩序安寧を祈念して、皇太子の宮に仕えるものにそれぞれ冠位を一階ずつあげるという昇叙がおこなわれた。吉備真備にいたっては、特別に冠位二階の昇位である。

聖武天皇のあまりにも突き進んだやり方を藤原氏は当然好ましくないと考えていた。

藤原氏の総帥ともいえる光明皇后は、平城京からさかんに指令をとばす。藤原氏の巻き返し運動は水面下でさかんに繰り広げられていく。

そんな空気を察知して、聖武天皇は、行基や弟子たちの恭仁京建設や紫香楽大仏造立のた

めの懸命な勸進聖があったにもかかわらず、何と天平十五年十二月二十六日に急に、恭仁京造営中止の決定を下してしまう。

明けて天平十六年（744）閏正月十一日、聖武天皇は難波宮に行幸。

その間、安積（あさか）親王が謎の死をとげる。

安積親王の母は、県犬養宿禰広刀自（あがたいぬかいのすくねひろとじ）であり、光明皇后の産んだ皇太子基王（もといおう）が幼くして死んだので阿部内親王が皇太子となっていたが、在世する唯一の皇子として、安積親王の立場は微妙であった。

難波行幸の途中安積親王は、脚の病気で恭仁京に引き返した。そして帰京直後に安積親王は急死する。藤原仲麻呂の仕業だと噂されたが証拠がない。

藤原氏の勢力拡大を危惧し、聖武天皇は二月二十六日に、難波を皇都にすると宣言してしまったのであった。

難波遷都宣言の理由は、表向きは、恭仁京に台風のけちがついたというものである。本当は、藤原仲麻呂をはじめ藤原氏と結び付いた官寺の勢力が伸長してきて紫香樂の大仏さえも支配下に置こうという動きがあったからであった。藤原の手から逃げたい一心で平城京を飛び出してきた聖武天皇だった。だが、藤三娘（とうさんろう）といっってはばからない平城京にいる光明皇后から派遣されてきた藤原仲麻呂が恭仁京造営にも辣腕をふるって台頭してきた。

藤原仲麻呂。

藤原南家武智麻呂の次男として文にも算術にも明るい豊富な学才を持ち、温厚な兄豊成と比べて極めて聡明、鋭敏であった。

光明皇后は、藤原氏から広嗣のような反乱者が出たことに引け目を感じ、父不比等から譲り受けた封戸五千戸を献上するなどしていた。

そんな藤原氏が何とか巻き返しをはかろうと有力な藤原氏を探したところ、光明皇后は、この仲麻呂に行き着いた。

藤原仲麻呂は、五節田舞を寿（ことほ）ぐ昇叙により、恭仁京にて従四位下参議にまでなっており、恭仁京造京にもその才覚を発揮した。藤原氏が恭仁京にくだんできたともなると、聖武天皇にとって恭仁京は居づらいところになってしまった。

聖武天皇は行基には悪いと思いつながらも、恭仁にはもういることができないと判断し、難波行幸となったのであった。

さきの安積親王を毒殺したとも噂される仲麻呂に対し、聖武天皇は恐怖した。

逃げのびる先、難波は安全かというところでもなかったのが聖武天皇にとって悲劇である。難波は、藤原宇合が知造難波宮事を勤めたというくらいの藤原氏ゆかりの土地であった。難波には、聖武天皇が頼りにする元正太上天皇がいるにはいたが、もともと上皇は藤原氏のいいなりである。行くも地獄、帰るも地獄であった。

藤原氏にとって最も良いのは、藤原氏の本拠地平城京に還都すること。

しかし、藤原氏はもともと、恭仁京から聖武天皇を引き離して、橘諸兄の勢力をそぐことには賛成だから、聖武天皇の難波遷都はとりあえず受け入れた。

聖武天皇は、行基に対して、難波には遷都はするがそのかわりに、紫香楽には頻繁に行幸をくりかえしながら、紫香楽甲賀寺の大仏を必ず完成するという約束をした。

そんないろいろな人々の思惑の中で、紫香楽の大仏はできあがっていく。

天平十六年（744）十一月十三日に甲賀寺に大仏の体骨の柱が建てられた。この儀式には、聖武帝自ら縄まで引いた。大安寺、薬師寺、元興寺、興福寺の四大寺の僧が集められ、橘諸兄、藤原仲麻呂も列席した。

四大寺の僧は、仲麻呂が集めたものである。

紫香楽の大仏も行基の功績とするのではなく、官寺の四大寺の支配下に置こうと仲麻呂が組織し、大仏を包囲しようと画策したものであった。

聖武天皇の夢、紫香楽の大仏にも藤原氏の手が密かに伸びてきていたのである。

天平十六年（744）二月二十六日に難波に遷都するという宣言を諸兄にさせた聖武天皇であったが、何と翌年の正月一日には、紫香楽宮の地を新京としてしまう。猫の目のようにくるくる変わる聖武天皇の決定をめぐって、周囲の者たちのあわただしい状況が続いた。

難波にいた元正太上天皇も紫香楽に遷（うつ）った。やはり、難波はやはり、藤原氏の勢力範囲なので居心地が悪かったのである。

聖武天皇は、藤原氏の傀儡には死んでもなりたくなかった。

新京騒動ばかりではない。聖武天皇は、さらに驚くべき決断をした。四大寺の僧を牽制する意味で、天平十七年（745）正月二十一日、行基に何の相談もなく、行基を今まで僧綱になかった役職『大僧正』につけたのである。

官寺の僧侶たちの上をいくことによって、藤原氏と寺院勢力との連合に風穴をあけようとしたのである。

紫香楽にいて『大僧正任命』の知らせを受けた行基は、別に驚きもしなかったし、喜びもあらわさなかった。

「大僧正など、われらの菩薩行に何になろう。そういう名利（みょうり）欲が修行にはもともとよくないものなのだ。仏の道には身分の上下などない。紫香楽の大仏を引き受けたのも、わしは僧としての出世を願ったのではなく、帝が盧舎那仏をつくることによって功德の光をこの国に遍く照らしてくださると思ったからなのだ。帝は、仏の力を利用して世を支配しようということを思召しではない。本当に、衆生とともに生き、衆生とともに幸せになりたいと願っておられる。わしには帝は、『三宝（仏法僧）の奴』になってもよいと仰せになった。そのお言葉には嘘がおりになられない。だが、帝にはお立ち場があるようじゃの。大僧正などという役職は、我々のこれまでの労をねぎらうお気持ちだろうが、わし自身には

いらぬ位じゃて。わしは皆とともにいることで充分幸せなのじゃよ」

弟子たちの思いは複雑であった。

行基の積年の苦勞が廟堂に認められ、僧としての最高の位を与えられた……。これほどの榮譽はない。

ところが、弟子たちには、大僧正ともなると、僧綱は薬師寺に集められることになっていたから、行基とは別れなければならなくなるという懸念もあった。

そこへ、行基が、一緒にいると明言したので弟子たちは、安心した。

それでは、結果的に行基が大僧正の位を辞退したかというそうではない。行基は、この大僧正の位を受けることにしたのである。

行基が、大僧正の位を受けたのは、出世欲ではもちろんない。真の理由がある。これまでに建立し寺院、布施屋、船息、橋、池など補修すべきときに必要となる費用に、大僧正によって得られる食封をあてることができるのである。これらの経営に大僧正の食封は助けになっても邪魔にはならない。

「やはり、行基は出世が目的だったのだ。菩薩が聞いてあきれる」

「恭仁に泉橋寺をつくって、諸兄にごまをすり、聖武帝に取りいってとうとう大僧正になりおった。すべて、計算づくのことじゃったのう」

口さがない僧たちは、嫉妬心を起こしてそう言った。

行基は、初めから世俗の名利には関心がないのだから、何と人から言われようと全然気にしなかった。大仏づくりや院の建設にもくもくと邁進するだけであった。

そのことは、大僧正になった天平十七年（745）に、摂津に大福院・難波度院・枚松院・作蓋部（さやべ）院と立て続けにつくっているのを見てもわかる。

行基には、有力な弟子たちがいた。

景静、玄基、法義、延豊、首勇、崇道、光信、信嚴、真成である。そのうち光信は尼僧である。

行基は近寄る者は、拒むことがないゆえに、数えたらきりがなほど弟子をかかえていたが、これらの僧たちは長い間、行基に仕え行基の教えの影響を受けて、小行基ともいえるほどになった。

したがって、このころの院は、老齡の行基に代わってこれらの弟子たちが中心となって院をつくったものである。紫香樂を京にしたものの、四月、甲賀の大仏の建立中、紫香樂では不審火による山火事が頻発した。宮城の東の山にも火事があって、聖武天皇自身が避難するという一幕もあった。

この山火事は二重の意味で紫香樂の宮にとっては困る事態である。

第一に、伐採する建材が燃えてしまつては、仏殿その他の建築木材が不足する。

第二に、人々の不安があおられることである。政情不安は為政者の責任である。

せっかく大仏によって世の安寧をもたらそうとしているのに全く違う結果を招くことになるのだ。不審火は、平城京に環都せんとする藤原仲麻呂の画策とも言われた。

人々の動揺に困り果てた聖武帝は、天平十七年五月二日と四日、官人たちとに四大寺の僧たちに都をどこにすべきかを尋ねた。全員が平城京環都を望んだ。

聖武天皇は、とうとう紫香樂京を断念し、五月十一日平城京環都となる。

このことによって、ついに聖武天皇が平城京にもどって『五年間の彷徨』は終焉をつげた。

聖武天皇は、紫香樂を離れる五月五日朝、行基を呼びよせる。人払いをして二人きりになる。

「行基大徳、すまないことをした。朕に力がないばかりに……」

人払いをさせて気を緩まされたか、涙声のようである。

聖武天皇は、橘諸兄からは恭仁へ引っ張られ、藤原仲麻呂からは難波へ引き寄せられ簾とした。だから、大仏があり、行基のいる紫香樂へ強引に遷都したのは最後のあがきだったのである。

だがその紫香樂京も、放火による山火事が頻繁に起こり、とても都といえる状態ではなくなった。

紫香樂の大仏は骨組みだけを残して、無残な姿をさらしている。

せっかく、有能な仏師国君麻呂（くにのきみまろ）らも加わって、政情不安さえなければ大仏は完成することは確実なところまでできていた。

心配されていた寄進も行基の尽力で多く集まっていたので聖武天皇は、悔やんでも悔やみきれない。

「お気をしっかりお持ちください。愚僧は大丈夫にござります。これくらいの不幸は今までにも随分ございました」

聖武天皇は、行基に対する禁圧の日々のことを指して、行基がそう皮肉を言ったのかと思い苦笑した。

「だが、口惜しい。大仏が完成するのがわかっていながら断念せねばならないとは。だが、行基大徳、この大仏づくりは朕の生涯の念願なのだ。朕は大徳のように生きたかった。衆生に歓呼の声で迎えられ、慕われ、真に愛する者たちに囲まれて喜びの中で生きたかった」「もったいないお言葉でござりまする」

「だから、朕は大仏づくりを平城京にもどってもやめなかつもりだ。このようなときに何だと大徳は思うかもしれないが、金鐘寺（こんしゅじ）に造ろうと思う。三笠山付近のあの地は丘陵であるが、山を削りながら大仏をつくればよいという妙案を造仏師の国君麻呂も申しておった。行基、もう朕のいうことは信用できぬか」

「信用するもしないも行基は、仏の教えのとおり生きております。大仏ができぬのなら、仏がここにつくることはないというお指しずなのでしょう。平城京につくることができれば

ば、それにこしたことはありません。どこにできてもかまわないのです。すでに紫香樂の大仏によって工人たちも造仏の技術（わざ）を習熟しましたので、その気になれば、さらに大きくて立派な大仏をつくることができるにちがいありません。すべて、仏のお導きによるものにござります。もう一度勸進をと、お申し付けならば、死するときまで、この行基お役にたちましょう」

「何という優しいものいいじゃ。行基大徳、そう言ってくれば、心が少し軽くなった思いがする。これまで行基大徳と過ごした日々は忘れることはないであろう。平城京でそなたを待つ。朕のあとに来てくれような」

「しかと、お約束申し上げます」

そういいながら行基は合掌した。

五日に紫香樂を出発し、恭仁京にひとまず逗留して翌日六日、聖武天皇の車駕（しゃが）が、恭仁京泉橋のところにさしかかった。

すると、何百、何千という百姓が歓声を上げている。聖武天皇は、民衆がこのように迎えてくれるのは、初めての経験である。百姓たちは、行基が育てたといってもよい者たちである。聖武天皇の人となりは行基から聞いているのだろう。

恭仁京を捨て、難波、紫香樂と都をあちこちと移動したことなど民衆の誰もうらみには思っていない。ひとときでもこんな田舎村が帝の住まう京になったことを誇りにさえ感じている。そんな素直な考え方が民衆たちにできるほど行基は、人徳でもってたくさんの人たちの心を和（なご）ませ感化したのである。

聖武天皇は、感動にうち震えた。

民衆は、きちんと整列している者もいれば、踊り回っているものもいる。祈るように手を合わせている者、万歳をしている者さまざまである。

車駕の中で、聖武天皇は、涙を流していた。

聖武天皇は、行基に、人々の歓呼の声で迎えられ、慕われることのうらやましさを言っただけである。

それが今、自分に向けられているかと思うと、とめどもなく嬉（うれ）し涙が出るのであった。

民衆済度のために菩薩行をしているのだといつか行基は言った。

その意味が聖武天皇には今骨身にしみてわかるような気がした。

《そうだ、やはり大仏を造ろう。そして、この世に仏の慈悲を、喜びを、光を遍（あまね）く照らしていただく》

聖武天皇は、決意を新たにした。

平城京にもどって藤原氏の傀儡になるのかと思い憂鬱な気分になっていたのが、嘘のように晴れた。

段々畑に行基が立っているのが見えた。

にこやかに見送ってくれている。

行基は、恭仁京・紫香樂京を捨てていく自分を非難するどころか、平城京の大仏造立の手伝いまで約束してくれた。

聖武天皇は、この男に人生で巡り会えたことを心から感謝した。

東大寺大仏開眼

天平十七年（745）十一月に、玄昉が筑紫の観世音寺の造営の任にあたるという名目で九州の太宰府へ追放された。

唐皇帝から紫衣まで授けられ、帰朝の際に、五千巻もの経典をもたらし、聖武天皇の母、宮子の憂鬱病をはらして宮中での権勢をほしいままにした玄昉。

その玄昉が、追放されていった。

大僧正になった行基に対し、玄昉の末路はあわれである。九州着任後まもなく藤原広嗣の残党により惨殺されてしまったという。

橘諸兄と藤原仲麻呂の確執は、平城京環都でもって藤原側の勝利となった。

藤原仲麻呂は、平城京にもどってきてからは水を得た魚のように、藤原氏の興隆のための手段を講じていった。

玄昉左遷はその一つである。

吉備真備もうまく泳いだが結局、天平勝宝二年（750）正月、筑前守として九州に左遷させられてしまう。

藤原仲麻呂は、父不比等譲りの大きな眸（ひとみ）を輝かせて、独り言をいう。

《ようし、盧舎那仏建立の仕事も我がもらおう。これを足掛かりに藤原の世の花を咲かせてみせようぞ》

藤原仲麻呂は、気炎をあげた。だが、聖武天皇は大仏を自分の最後の砦のように感じたので大仏造営は、仲麻呂の自由にはさせまいとし、相変わず、橘諸兄に任せたのである。

橘諸兄が玄昉、吉備真備をもぎとられ、勢力を弱めながらもなかなか政界から退かなかつた理由が大仏造営を任せられていたことにある。

橘諸兄にとっても大仏造営は仲麻呂に死んでも渡せないものであった。

また、仲麻呂に大仏造営の権利が移らない理由は、もう一つ意外なところにある。

光明皇后である。光明皇后は、仲麻呂に平城京への還都の指令をとばしていた。恭仁京と平城京にそれぞれにいて住居と政治の方針を異にしていた聖武天皇と光明皇后に共通の考えが一つだけあった。

長屋王の怨念に怯（おび）え、藤原四卿の死、わが子基（もとい）王の死を悼む光明皇后にとって仏の道は聖武天皇同様、救いであったのである。

今度、盧舎那仏造立が計画されている金鐘寺は、もともと聖武天皇の幼くして亡くなった

基皇子を弔うために立てられた寺である。

住持良弁（ろうべん）は、大安寺の新羅僧審詳（しんしょう）を招いて華嚴会（けごんえ）を催した。そして、「国分寺建立の詔」によって金鐘寺は、大和金光明寺となって、ついには総国分寺としての寺になる。のちの東大寺である。

光明皇后が一も二もなく、平城京に大仏をつくり、東大寺をつくることに熱心だったのは平城京が藤原氏の本拠だったからばかりでなく基王の弔いでもあったのである。

東大寺をつくるのが政権を握る者のあかしともなっている。聖武天皇は、平城京に帰ってから大仏造営の采配をしているかぎり藤原氏に主導権を奪われることはなかったのである。

国君麻呂が造仏師として紫香楽に引き続いて大仏鑄造の任が下った。以前から金光明寺（金鐘寺）の造仏所で腕をふるっていた。良弁に命ぜられて三月堂の不空羂索（ふくうけんじゃく）観音も国君麻呂の作品である。役に立つ造仏師である。父は、百済から渡来した国骨富（こくこつぶ）の孫であり、この国骨富は、鑄造工、造仏工といって工人を引き連れてきた。この工人たちをそっくり国君麻呂は受け継いでいた。

平城京の大仏造立を金鐘寺に誘致したのもまずは良弁、そしてこの国君麻呂であった。良弁と光明皇后は、強い関係で結ばれていたもので、平城京に還都したからには大仏造立は金鐘寺をおいて他には考えられなかった。

聖武天皇は、平城京においては光明皇后のことを聞かざるをえなかったし、それこそ大仏がどこにできてもかまわなかったので金鐘寺に大仏を安置し、ひいては総国分寺とするのに異論はなかった。

聖武天皇の願いと光明皇后の利害が一致したことになる。

国君麻呂の他に、もう一人東大寺建立に際して忘れてはならない人物に佐伯今毛人（さえきいまえみし）がいる。

当時、大和小掾（しょうじょう）であったが、人柄がよく人の扱い方に天才的な手腕をもっていたので、役夫たちは不平を言わずよく働いた。

次に、いくら良い人材や技術があっても、なくてはならないのは膨大な労働力と財である。

聖武天皇は橘諸兄に言う。

「行基大徳にはもうひと働きをしてもらわなければならない。金鐘寺で大仏づくりをするのに、紫香楽に残してきた土台や体骨の柱は、もう使えまいか」

「木材、瓦、粘土、木炭など新しい仏殿や大仏に利用できるものが数多くございます。紫香楽より、運ばせるようすでに命じております」

「そうであったか。ところで行基は平城京にもどってきたか」

「御意、菅原寺にもどったと聞いております。ですが、行基は老齢のうえ、病がちになっているということも聞いております」

「そうか心配なことよ。大徳の身の上に何か起こってはならぬ。良い薬師をよこして養生するように取り計らいなさい」

「はは」

聖武天皇は行基が病気だと聞いて気が気ではなくなってきた。この世で頼れるのは行基だけだとさえ思っている。

床に伏せていても、行基は元気になると、すぐに体に無理な勧進をするため、また体をこわしてしまうのだった。

そこが行基のいいところなのだが、弟子たちも心配でたまらない。

「お休みになられませ。勧進などは、弟子たちの私たちがしますので」

東大寺盧舎那仏の勧進に行基の弟子たちは奔走した。

勧進ばかりでなく、弟子たちはまさに行基のように疲れをしらない活動をし、その間にも院を次々と完成させていった。

行基は、天平二十年二月に菅原寺にひきこもった。行基は、弟子たちから院の落成の報を聞くたびにその都度本当にうれしそうな顔をする。

「そうか、できたか。無理はせなんだか。そうか、よう頑張った」

弟子たちも、行基からそう褒められると、それまでの苦労はふっとんだ。行基の喜びは皆の喜びとなったのである。

大僧正になった当初、あれこれを変なことをいう輩がいたが、もう悪口をいうものはいない。

だれもかれも、大僧正になってからの行基の行動に俗っぽい出世欲などさらさらしないことを見てわかったからである。

弟子たちの中に、紫香樂の大仏建立が思い半ばで完遂できなかったことについて、ぐずぐずと行基にくりごとを言うものがいた。

行基は、その者を教諭す。

「紫香樂の大仏は完成をみなかったが、皆の心の中にいらっしゃるのではないのか。目を瞑（つぶ）ってみなさい。ほら、見えるじゃろ。きらきらして、目映（まばゆ）いばかりじゃ。今手掛けている東大寺の大仏の光がそのうち国の衆生すべてを照らしだす。仏の功德そのものじゃ。紫香樂の大仏よりずっと大きな大仏じゃ。だが、形も紫香樂の大仏と変わらない。大仏が紫香樂にできようと平城京にできようとかわね。大仏様がこの世の衆生を済度してくださればどこにできようと、まただれが造ろうとかまわん。ありがたいことじゃ。だから、紫香樂の大仏ができなんだことをいまだに言うのは、煩惱にとらわれてからじゃ。まずは衆生のことを考えなさい。われも人もすべて菩薩であり、みなとともに菩薩行をこれからも励むのだ。わしは、先に仏のもとに行き盧舎那仏の完成をあの世から見守ろうぞ」

弟子たちは、行基の最後の教えだと受け取った。

泣いてはならぬ、しめっばい空気は行基の看病にならぬと弟子たちは自分たちに言い聞かせながらも、頬に涙がつたうのを禁じ得なかった。

平城京右京の菅原寺で、床に伏してから一年ほどの歳月が流れた。天平二十一年（749）二月二日、夜半に行基は危篤となる。

行基の重態を聞き付け駆けつけた各地の弟子たちは、何日も寝ずの看病を続けた。

いよいよ危篤におちいったとき、景静（けいせい）はじめ十弟子とも呼ばれる者たちすべてがそろった。

行基を慕う人々が、夜遅くだというのに大勢、菅原寺に駆けつけた。

屋内にも屋外の境内にも人、人、人である。行基を慕う人々でいっぱいである。

経が読まれ始めたので屋外の人たちにも、危ない状況だということがわかった。

法相宗なので『弥勒経』であった。

民衆にも、ところどころ経の内容が理解できた。

というのは、ふだんに行基の教えの中にその内容が出てくるからであった。行基は終生、経典を大事にした僧であった。

人々の臉（まぶた）に、元気な時分に行基が説教をしているときの声や顔が映し出されていく。

やがて、屋内から大声で泣き叫びながら飛び出してきた。

「和上！和上！」

皆、行基の入寂を知った。

すすり泣く者、慟哭（もがき）の声をあげる者。信じられないといった様子の者。

釈迦の入寂もこのようであったかと想像された。

光りがすうっと東の空に向かって流れ星のように動くのを多くの人々が見た。それを目で追った誰かが叫ぶ。

「東大寺の方だ！」

《仏に召され、行基菩薩は本当に菩薩におなりに、これから完成する大仏のある東大寺の方へ行かれたのだろう》

皆、そう思った。行基入寂、享年八十二歳であった。

二月六日、弟子たちは、遺言どおり行基の遺体を大和国生駒山の東陵に火葬した。まるで、行基の師、道昭が栗原（おうばら）で火葬に付されたときのようなのである。

道昭のときに行基の役割を弟子の景静が果たしていた。

《わたしは行基和上のようにではありません。しかしながら、これからはこれこれこういう時は行基和上ならどうあそばすだろうと考えながらやっっていこうと思います》

景静は、そうつぶやきながら、遺骨を拾って舍利瓶におさめた。

真成（しんぜい）は、行基の伝記をその舍利瓶にきざんで、生駒山東陵の山上を結界して墓地とした。そこは竹林寺と呼ばれるようになる。

天平二十一年（749）行基入寂後、二月二十二日に、陸奥の百済王敬福（きょうふく）が、小田郡（おだのこおり）から黄金が出たといってきた。

「行基大徳が亡くなられたと聞き、朕は悲しみにくれておったが、行基大徳の功德のように、こんなうれしい報（しらせ）が伝えられるとは……」

聖武天皇は喜びのあまり、諸兄に黄金出現の報告をするために宣命を述べさせている。

「三宝（みほとけ）の奴（やつこ）と奉る天皇（すめら）が……」

天皇が『仏の奴』とまで宣（の）べる大変な宣命であった。

自信がついた聖武天皇は、橘諸兄や大伴・佐伯といった反藤原氏を昇位する。それに比べて、藤原氏からは温厚な藤原豊成が右大臣になったものの、野心的な仲麻呂は叙位されなかった。

年号を、天平感宝元年とした。

しばらくして、聖武天皇は健康をそこない、政務をとれなくなり譲位することにした。七月二日、阿倍皇太子が即位し、孝謙天皇となる。

年号も天平勝宝元年と改まった。一年の間に二度までも改元がなされたのである。

これにともなって、左大臣に橘諸兄が据（す）えられる一方で、今まで冷遇されていたといってもよい藤原仲麻呂が大納言となって返り咲いた。

さらに、光明皇太后は采配をふるい、皇后宮職（ぐうしき）を改称拡大して紫微中台（しびちゅうだい）とした。

その長官に藤原仲麻呂が就く。

つまり、紫微中台は藤原仲麻呂に左大臣橘諸兄以上の力をつけさせるためのものであった。

藤原仲麻呂は光明皇太后の権勢をかさに太政官に匹敵するほどの権勢をもつに至った。

橘諸兄の頼みの綱の聖武天皇は病に伏せたままである。

橘諸兄の立場はみるからに弱いものになった。

東大寺建立には、膨大な用材、粘土、土、木炭、水銀、銅、黄金などの資源と、のべ二百六十万人という多大な労働力を必要とした。聖武天皇の病状がおもわしくないので大仏の完成が急がれた。

大仏殿すら満足にできあがっていない。

聖武天皇の生きているうちに開眼会を開かなければということで、急速に造営は進められた。

そのかいあってまもなく、大仏殿、大仏鑄造も終わり、螺髪（らほつ）もできあがった。

ところが、肝心の塗金が途中である。きらびやかな大仏でなければありがたみが出ない。聖武天皇の病もいっこうによくならず悪くなるばかりである。

塗金が途中でも、大仏開眼（かいげん）だけは早くせねばと、ついに天平勝宝四年四月八

日の釈尊降誕の日にちなんで大仏開眼の日取りが決められた。

実際に大仏開眼会が営まれたのは翌日である。聖武天皇の病状が悪化したためである。開催された大仏開眼会は壮大なものであった。

天平勝宝四年四月九日、導師菩提遷那（せんな）、華嚴講師隆尊、都講に行基の弟子景静が据えられた。

聖武太上天皇・光明皇太后・孝謙天皇が臨席し、雅楽、林邑（りんゆう）、高麗（こま）などの音楽が流れる

中を中央の布板殿（ふはんでん）まで進んだ。

そして、文武百官、法会に臨む僧一万。

大仏殿の周囲には種々の美しい造花、五色鮮やかな繡幡（しゅうばん）が薫風とともにひらめき、国際色豊かな光景が繰りひろげられる。

開眼師菩提遷那が、筆をとって大仏の開眼をすると興奮は最高潮に達した。

「おおっ」

自然にうねりのようなどよめきが起こった。

筆には、五色の縷（る）がむすばれて仏との結縁（けちえん）の糸が垂れていた。

華嚴経が流れるなか、南大門より左右に別れた幄舎（あくしゃ）では、各種各国の舞が舞楽とともに催されて大変な賑（にぎ）わいをみせた。

病で熱っぽい聖武天皇の顔も、この日ばかりは晴れ晴れとしていた。

聖武天皇は、このとき行基に心の中で呼びかけていた。

「行基大徳、やり遂げました。この大仏の尊顔をご覧ください。大仏の光明が遍くこの世を照らしてくれるでしょう。大徳のいう衆生済度がかなえられるのです。この大仏をお見せしたかった。でも、今この大仏殿のどこかで、ご覧になっているのかもしれませんが。もうすぐ、朕も仏のもとへまいりましょう」

聖武天皇ほほかにもう一人、大仏殿の中で行基のことを思い出しているものがいた。

都講をつとめている景静である。

「和上、ご覧になっていらっしゃいますか。この大仏の大きさを。わたしたち弟子らも賢明に勧進にまわりました。行基和上の教えは生涯忘れることはありません。他を利することの素晴らしさが、また菩薩行の正しさが本当にわかりました。自分なりに精一杯、和上のように生きていこうと思います」

景静の目に大仏の傍らに行基がいるのが、はっきりと見えたように思えた。

東大寺大仏はいまも、光明を世界に遍く照らしている。

（完）

参考資料

続日本紀 国史大系		(吉川弘文館)
大仏建立	杉山 二郎	(学生社)
行基と律令国家	吉田 靖雄	(吉川弘文館)
海人と天皇	梅原 猛	(新潮文庫)
藤原不比等	上田 正昭	(朝日新聞社)
行基	井上 薫	(吉川弘文館)
藤原仲麻呂	岸 俊男	(吉川弘文館)
古代朝鮮と日本仏教	田村 圓澄	(講談社)
仏教伝来と古代日本	田村 圓澄	(講談社)
藤原不比等	高島 正人	(吉川弘文館)
天平の僧行基	千田 稔	(中公新書)
宗教者の原点	久保田展弘	(新人物往来社)
奈良の古寺	千賀 四郎	(小学館)
行基事典	井上 薫 編	(図書刊行会)
東大寺	平岡 定海	(歴史新書)
古代の王朝と人物	松尾 光	(笠間書院)
奈良の都	青木 和夫	(中央公論社)